発掘ニュース 25

# 法金剛院旧境内の調査

（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

南からみた法金剛院の推定図

**法金剛院のなりたち**　法金剛院は双ヶ岡の東麓、京都市右京区花園扇野町にあり、現在は律宗の唐招提寺に属する寺です。双ヶ岡の周辺や嵯峨野の地は風致に勝れた所として親しまれ、天皇や貴族たちの山荘が造られました。

右大臣清原夏野は、天長七年（830）この地に、山荘を営みます。夏野の死後、山荘は双丘寺、後に文徳天皇によって御願寺として天安寺に改められます。そして、天安寺の跡地に鳥羽天皇の中宮待賢門院璋子の発願によって大治五年（1130）10月に法金剛院が造営されました。待賢門院は源師時を遣わして地形などを下見させ、天安寺指図などで検討を行なったところ、東と西に川が、背後には岡があることで地形的に優れており、造営地として選びました。造営の様子は『中右記』や『長秋記』でうかがうことができます。

寺域の中央には大池が掘られ、池を挟んで西には御堂（阿弥陀堂）、大門が造られ、東には御所、御門が造られました。その規模はおよそ１町を占めるものであったと記述されています。それ以後も造営は続けられ、北斗堂・塔・経蔵・南御堂・三昧堂・東御堂などが順次建てられます。また、競べ馬が行なわれ、馬場屋の建物も造られていたようです。

**発掘調査の成果**　法金剛院の最初の調査は1968年の丸太町通の拡幅の時に行なわれました。その後、JR山陰線立体交差化、花園駅周辺の整備事業などにともなって調査が行なわれています。

1968・69年の調査では大池の西側で御堂に関連する建物遺構と池

**東御所跡**　中門廊、侍所と塀（東から）

**塔跡と池跡**　白砂が敷かれた洲浜（東から）

**東御門の地業跡**（北西から）

**中門跡と雨落溝、遣水**（南から）

の西汀が検出されました。1970年の境内整備の調査では、一段しか見えていなかった青女の滝の石組の下に、さらにもう一段石組が確認され、滝壷の底に置く「水受石」もあることが判明しました。

1995・96年のJR山陰線の南側新設道路の調査では池の西岸近くで一辺4.8ｍの三重塔跡と白砂を化粧として用いた緩やかな勾配の西汀を検出しました。西京極大路と中御門大路の交差点の中央部では、門の地業跡を検出しました。地業跡は一定の単位ごとに固く叩き締めて、その単位を河原石で積み上げて縁取るという工法が用いられていました。この門は文献・絵図などから東御門と考えられます。

花園駅広場の調査では、当院の東を限る築地跡を西京極大路の道路推定地で検出しました。また、築地跡の西側では当時の貴族住宅の様式である寝殿造建物を構成する中門・中門廊を、その東では侍所と塀を検出しています。また、中門廊の西では南北方向の小川風の流れに景石を要所に配した遣水や、池の東汀などの南庭部も検出されました。これら一連の遺構は、東御所の一部とみられます。

**法金剛院のようす**　これまでの調査成果や明治時代の地籍図などから法金剛院の寺域やその様相をまとめてみますと、寺域は南北３町・東西２町で、北辺は近衛大路、南辺は春日小路、東辺は西京極大路に面していました。境内の中央には瓢箪型の園池が造られ、北には五位山を背に滝が、南には築山が造られます。池をはさんで東には寝殿造の御所が造られ、西から南には御堂や三重塔などの堂宇が建ち並ぶように配置されていたことが想像されます。

このように栄華を誇っていた法金剛院も治承五年（1181）の火災から徐々に史料から姿を消し、鎌倉時代には円覚上人が融通念仏を広めて復興しますが、応仁の乱の大火などで仏堂を失い、以後も田畑化して寺域は縮小していきます。現在は、五位山を含め青女の滝と池が残され、京都市内で唯一の平安時代末の院政期の庭園として存在しています。　（小松　武彦）

**庭園に今も残る青女の滝**